DOCUMENT RESUME

ED 411 686 FL 024 738

AUTHOR	Yukawa, Emiko
TITLE	Japanese Parents Bringing Up Their Children in English. Monographs on Bilingualism No. 2.
INSTITUTION	Japan Association of Language Teachers, Okinawa.
PUB DATE	1994-10-00
NOTE	17p.
AVAILABLE FROM	Department of General Education, Osaka Institute of Technology, Omiya 5-16-1, Asahi-ku, Osaka 535, Japan (300 yen).
PUB TYPE	Information Analyses (070) -- Reports - Research (143)
LANGUAGE	Japanese
EDRS PRICE	MF01/PC01 Plus Postage.
DESCRIPTORS	*Bilingualism; Case Studies; *English (Second Language); Foreign Countries; Graduate Study; Higher Education; Language Acquisition; Language Proficiency; Language Research; Language Teachers; *Parent Child Relationship; Parent Role; Second Language Learning
IDENTIFIERS	*Japan; Japanese People; United States

ABSTRACT

This monograph describes the experience of a Japanese family raising their children bilingually in Japan by adopting English as the home language. Both parents are native Japanese who went to graduate school in the United States and now teach English at the college level. Although both parents are very proficient in English, they recognize they will never reach native speaker level. Therefore, they decided to raise their two children as native English speakers, who will acquire Japanese from the community outside the home. In describing the methods used by the parents to raise their children bilingually, the decisions they had to make about culture, and the various periods in which one language or the other dominated as the family moved back and forth across the Pacific, the paper frequently cites and evaluates current research on bilingualism. (Author/VWL)

****
* Reproductions supplied by EDRS are the best that can be made *
* from the original document. *
****

ED 411 686

Monographs on Bilingualism No.2

日本人家庭での英語子育て

Japanese Parents Bringing up Their Children in English

湯川 笑子

Emiko Yukawa

U.S. DEPARTMENT OF EDUCATION
Office of Educational Research and Improvement
EDUCATIONAL RESOURCES INFORMATION CENTER (ERIC)
This document has been reproduced as received from the person or organization originating it.
☐ Minor changes have been made to improve reproduction quality.
• Points of view or opinions stated in this document do not necessarily represent official OERI position or policy.

PERMISSION TO REPRODUCE AND DISSEMINATE THIS MATERIAL HAS BEEN GRANTED BY
Stephen M. Ryan.
TO THE EDUCATIONAL RESOURCES INFORMATION CENTER (ERIC)

FL 024 738

Produced by the Bilingualism National Special Interest Group of the Japan Association of Language Teachers.

BEST COPY AVAILABLE

Monographs on Bilingualism No.2

日本人家庭での英語子育て

Japanese Parents Bringing up Their Children in English

湯川 笑子
Emiko Yukawa

This monograph describes the experience of a Japanese family raising their children bilingually in Japan by adopting English as the home language. Ms. Yukawa and her husband are both Japanese who went to graduate school in the U.S. and now teach English at the college level. Though very proficient in English, they both recognize that they have not and will never reach native speaker level. They therefore decided to bring up their two children to be native English speakers who also learn Japanese from the community outside the home. In describing the methods they use, decisions they have had to make about culture, and various periods in which one language or the other dominated as they have moved back and forth across the Pacific, Ms. Yukawa frequently refers to and evaluates current research on bilingualism. This monograph thus offers the reader of Japanese not only an interesting case study, but also a solid introduction to the literature of the field.

Produced by the Bilingualism National Special Interest Group of the Japan Association of Language Teachers.

© October, 1994. Osaka, Japan.

その１　脳への悪影響?

我が家は、大学で英語とコミュニケーションを教える夫、短大などで非常勤講師として、英語、教科教育法を教える私と、６才の春希、３才の翔子からなる標準的な日本人家庭です。ただ、家庭内の使用言語は日本人なまりの英語です。その他に、子供達は、両親以外の日本人と富山弁で話し、夫と私は子供達の目を盗んで関西弁をしゃべります。日本語は親以外の人から学ぶにまかせ、家では全部英語というバイリンガル子育てが、これで４年半続いています。

私達が二か国語子育てをしていることを知ると、大半の人が、「そんな小さい子に、二か国語を教えたりして、脳の発達は大丈夫?」とか、「二つの言葉がごちゃごちゃにならない?」と心配してくれます。外国語の先生、言語学や心理学の研究者なども、その例外ではありません。

最近の応用言語学やバイリンガリズム研究の成果を知らず、しかも、日本のように一か国語しか使用しないモノリンガリズムの国に生まれ育った人にとっては、私達のように、国際結婚しているわけでもなく、子供を連れて、英語圏の国で長年生活していたわけでもないのに、子供が二か国語を同時進行で習得していくということが、あまりに珍しく、奇異にすらうつるようです。

1960年以降に発表された応用言語学等の文献によると、昔、アメリカ等で移民の子を扱う先生達が信じていた、「複数の言語を使って育つと脳に負担がかかって、学校の勉強についてゆけたい」等の現象は、バイ／マルチリンガリズム自体が脳に及ぼす影響ではなく、移民家庭の経済的、社会的他位が低いことの産物だと分かってきました。シンガポール、マレーシアや、その他世界の多くのマルチリンガルの国々では、あらゆる階層に属する子供が複数の言葉を当たり前のこととして使い分けて育っていますし、カナダの英語を話す中流家庭の子供が、わざわざフランス語で話す学校へ通って（イマーション方式）、学業、語学習得の両方で成功をおさめてる例などがどんどん発表されるようなってきたからです。

モノリンガルの子供とバイリンガルの子供を比べて、いろな知的発達を調べると、バイリンガルとして育つことからだは、子供を賢くも馬鹿にもせず、ただ、言葉の恣意性に気づくのを早くするという違いがあるだけだといわれています。

また、周りの人間が、二つの言語をごちゃごちゃに混ぜて話すという習慣がない限り、子供は二つの言語をちゃんと使い分けるというケーススタデイもたくさん報告されています。

ですから、「二か国語子育ては、１）世界の標準であり、２）子供の脳に悪影響を与えたり、二つの言語を混乱させたりすることはない」といえます。我が家の子供達も、日本語と、英語のどちらにふれる時間が長かったかによって、一時的に英語強くなったり、日本語の方が強くなったりしながらも、話す相手によって、二か国語を使い分け、すくすくと育っています。

その2　ネイテイブスピーカー並みの英語力を

私は、良い教材のあふれる今の日本でなら、日常会話を流暢に話すくらいのことは、留学や早期英語教育などの特別なことをしなくても、普通に中学時から習い始めても充分できると考えています。ただし、NS（ネイテイブスピーカー）並みの英語力となると話は別です。NS になれるかなれないかを分けるのが、１２才だという Oyama（１９７６）の研究、いや７才だという Hyltenstam（１９９２）の研究等、外国語習得開始期が ultimate attainment（最終到達度）と大いに関連がありそうだ（言語学習における臨界期の問題）という研究はいくつもあります。また、遅くして外国語を習得し始め、一見NS にみえる NNS（ノンネイテイブスピーカー）を詳しく調べてみると、聞き、話し、読み、書きとすべての技能において、NSにははっきり劣っているという研究結果も繰返し発表されています。

私達は、夫婦ともにアメリカの大学院で修士過程を終えました。また、時には、学会で会うアメリカ人等に、「上手な英語だ」とお世辞を言われたりすることもあります。しかし、毎日英語の文献を読んだり、論文を書いたりするたびに、日本語での読み書きと比べて、スピードの遅いこと、表現のレパートリーの幅が狭いこと、NNS ならではのエラーをいまだに犯す事など、自分が NS の英語力とはほど遠い力しかないことをいやというほど感じます。聞き、話す分野についても同じです。自分の英語が、日本語と同じくらいのレベルだったらどんなにいいだろうと思います。

ですから、私達夫婦が２０年以上の英語とのつき合いを経ても到達できなかった（そして、多分一生だめだろうと思える）NS並みの力を子供達にはつけてやりたいというのが私達の目標です。

子供の知的レベルも低く、活動範囲も狭い６才くらいまでの間は、家庭内での対話、ビデオ、本の読み聞かせからのインプットで、同年齢のモノリンガルの英語話者の語学力が

充分つくことは春希のケースで分かりました。今後、読み書きが入ってくると、日本語と同じペースで英語力をのばしていくのは、かなり難しくなるだろうと覚悟はしています。親の仕事に合わせ、英語圏の国へ連れて行くなど、出来る限りの工夫で刺激し続け、自分の意志で研さんを励むような年齢になるまでの橋渡しにするつもりです。

その3　良いとこどりの折衷文化

日本語と英語の高い言語能力が小さい時から身につくのは願ってもないことだとしても、「日本の地で、日本人の親の間で、英語を使って子育てをするなんて、あまりに不自然ではなかろうか？」という疑問が残ります。つまり、言語にくみこまれた二つの文化や価値観がいったいどう子供に伝えられていくのかという問題です。こういう疑問を私達にぶつけた友人もいましたし、実際、私達にとっても、二か国語子育てを決心する上で最後までひっかかったのがこの「言語と文化」の問題でした。

解決の鍵は、英語がひとつの地域で、ひとつの国民と密接に結びついている他の多くの言語と違い、国際語として広くいろんな文化の人に使われているという事実にありました。英語は、英米人だけでなく、インド人やフイリピン人も何百年とはぐくみ使ってきた言語です。世界中のパイロット、ビジネスマン、学者が仕事に使う言語です。発音、文法、プラグマテイックスの全ての領域で違いのある、様々な英語の varieties（方言）が存在し、その違いが社会的に認められつつあります。国際的に英語を使う人々は、この違いを前提とし、たがいに気をつけてコミュニケーションをはかっています（1）。だから、我が家の子供達も、日米文化が混入した、「変な」英語で育ってもいいと思ったのです。

例えば、我が家では、英語でしゃべっているのにもかかわらず、翔子には春希のことを「お兄ちゃん」と呼ばせています。3才も年上の兄をつかまえて、英語流に Haruki　とよびすてにするのでは、兄は妹を助け、慈しみ、妹は兄を慕い、兄から学ぶという、良い意味での年齢差への自覚が薄れてしまうように感じるからです。言いかえれば、誰もかれもがファーストネームでよびあい、「平等」がたて前のアメリカ文化より、年齢差に敏感な日本文化を私達夫婦は採用したのだといえます。

しかし、逆に、英語にしかない表現で、日本の親はそれに対応する日本語を口にしないけれど、そのメッセージが気に入って我が家で多用しているセリフもあります。例えば、I

love you や I'm proud of you　は、日本語になおしてしまうと気はづかしくていえませんが、英語でなら抵抗なく口にできます。アメリカへの留学や英語学習の過程で、夫婦ともに聞きなれていたからです。愛情表現や相手をほめる言葉を、臆することもなく、毎日幾度となく言うのは、日本人としてはやや特異なやり方です。

このように、我が家の子供達は日本人の親が話す英語を聞きながら、日本とアメリカの二つの文化を親の選択で良いとこどりに混ぜたかっこうでうけとっています。私達夫婦はそれでいいと思っています。私達自身が多分にアメリカ文化の影響をうけた折衷文化の産物です。どの家の子供も、親が良しと信じるものを与えられて育つしかないのですから。子供達が成長すれば、今度は自分で、どの地で、どういう目的で、どんな相手と英語を（あるいは日本語を）使うのかによっていろんな調整をしていくでしょう。

注1

イーストウエストセンターのLarry E. Smith イリノイ大学のBraj B. Kachruは、英語のいろんなvarietiesを認めようという社会運動の指導者です。

その4　　4才でやってきた日本語の壁

幼時期から二か国語を習得したバイリンガルと一口にいっても、その人が持つ二つの言語能力のレベルはいろいろです。バイリンガルのケーススタデイの草分けとして名高いLeopold（１９３９、４７、４９a、４９b）によれば、彼の第二子のKarlaは、地域の言葉である英語は普通に使えても、家庭で覚えたドイツ語の方は、聞けば分かるけれども話せ（さ？）ない receptive（受動的な）力しかありませんでした。二つの言語を話せる場合でも、使う頻度の少ない言葉の方（minority language）は、Cummins（１９８１、１９８４）のいうBICS (Basic Interpersonal Communication Skills)、つまり日常の基本会話にとどまり、それ以上に高度な概念は表現できないといったケースもよくみられます。

また、同時に、周りの言語環境の変化に応じて、二言語の優劣のバランスが簡単にひっくり返ることもあり、その変化には実に目まぐるしいものがあります。

第一子の春希が１才半になった時に本格的に始めた我が家の英語子育ては、２年間ほどは、全く問題なく進みました。家では英語の本を読み、英語のビデオを見て、親も子も英語

をしゃべりました。他方、ベビーシッターさん宅や保育園では日本語をしゃべり、両言語ともに順調に上達していきました。

ところが、春希が４才に近づいた頃のことでした。お母さんっ子だったこの子が、保育園へ嫌がらずに行くようになり、降園後も園のお友達と遊び、家にある英語の本よりも、園で借りた日本語の本を読みたがるようになったのと、ちょうど期を同じくして、春希の英語が出にくくなったのです。それまでは、４時のお帰りの時間に保育園へ迎えにいっても、今まで先生と日本語でしゃべっていた顔を、くるっと私の方へ向けて、同じスピードで英語をしゃべっていました。ところが、３才も後半になるにつれ、そのコードスウイッチングのタイミングがだんだん遅くなっていきました。つまり、英語にスウイッチするのが、園の建物の外に出てからになり、家に入ってからになり、家へ入っても、Speak English! と叱られてからでないと変わらないという風になりました。

英語をしゃべらないと言っても、別に親に反抗しているという風ではありませんでした。日本語以外に英語をしゃべれるということを肯定的にうけとっていることは、言葉の端々から読み取れるのですが、どうにも英語が出てきません。Speak English! と言われると、文章が一文だけ英語に変わるけれど、直後にまた日本語に戻りました。「日本語を使っている限り返事はしない」といじわるを言ってみたり、「これでは翔子ちゃんが英語をしゃべれるようにはならないでしょう」とさとしてみたりもしました。

しかし、１日に１０回以上も Speak English! と言ってしまうと、「さぞ言われる方も辛かろう。別に悪いことをしているわけでもないのに、こんなに叱って、発達全般や、情緒、親子関係に悪影響がでたら元も子もないのに」と、こちらにも迷いがでてきました。地域の言葉が強くなるのは、春希の社会化が進んでいる証拠で、親の母国語でもない minority language が弱くなるのは当然すぎるくらい当然のことなのだと、自分に言い聞かせようともしました。このようなジレンマが半年くらい続きました。

結局、この「４才の壁」は、イギリスで日本学を学んでいた友人のピーターに６週間家へ来てもらうことで解消しました。偶然にもその頃ピーターは、日本人家庭でのホームステイ経験を望み、同時に何らかのアルバイトを捜していたのです。私達の契約は、ピーターに部屋と食事を提供し、少し謝礼を払う代わりに、子供達が家にいる間（保育園から帰った後と週末）に遊び相手をしてもらうということでした。

私達の目的は、ピーターに来てもらうことで、春希に、どうしても英語を話さねばなら

ない環境を作ってやることにありました。というのは、春希が私達両親に英語をしゃべらないのは、日本語が通じることが明らかな私達には、弱くなっている英語をわざわざ使う努力などしなくてもよいと、無意識に語用論上の選択をしているからではないかと私達は感じていたからです。裏の上、春希は、日本語が全く分からない（ということにしてもらっていた）ピーターに進んで英語をしゃべり、４才半の夏のこの６週間で、英語と日本語のバランスがすっかりもとに戻りました。

実は、この時期にこれだけ強かった春希の日本語が、１年後、私の留学に同行して５ヶ月間ハワイに住んだことで、全くでてこなくなりました。今度は決定的に英語の方が強くなったのです。このことについては次回にお話します。

絵：「Happy Halloween」：湯川 春希 （５才）

その５　　今度は日本語が出てこない

前回で、４才に近づいた春希の英語が弱くなり、４才半の時にイギリス人の遊び相手を雇うことでそれを元に戻したことをお話しました。今、３才と８ヶ月になった翔子の方に全く同じ現象がみられます。今回も、日本語が出なくなったのと、休日や保育園の降園後に私とではなく、お友達と遊びたいと言い出したのとがぴったり一致しています。ただ、前回の経験のおかげで、今度の壁には私達はショックをうけていません。また、対策もすでに計画しています。

さて、話は２年前（１９９３年）に戻ります。私はハワイ大学ＥＳＬプログラム（修士課程）を１９９７年に始めたのでしたが、この年の秋学期に中断していた勉強を再開し、残りの単位をとってしまおうと、ハワイに戻りました。５才半になっていた春希をハワイの公立小学校のキンダーガーデンに通わせながら手元におき、２才半だった翔子は大阪から応援にかけつけてくれた母と、夫のもとに残しました。この５ヶ月の間に、春樹は深刻な文化適応問題を経験したのですが、これについての報告は現在準備中の拙著にゆずることにして、ここでは、実にドラマチックだった春希の言語変化についてお話します。

私は、たった５ヶ月のために「家では英語」のルールを崩すと、帰国後、元へ戻せなくなると考え、ハワイでも英語を使い続けました。日本語を多少忘れるだろうとは思っていましたが、とり戻すのに時間はかかるまいと思い、それには目をつぶることにしたのです。従って、春希が日本語を使ったのは、毎週土曜日、私が図書館で勉強するために、日本人のベビーシッターさんの所へあづけた時だけでした。

ハワイ滞在４ヶ月が過ぎた日のことです。４才を迎えて以来、あんなに強くなっていた日本語がとうとう出てこなくなりました。しりとりなど、単語を一つ言うゲームならできるし、相手の言うことは全部理解できる様子なのですが、「のり子おばちゃん」（月に一回、春希の日本語喪失のデータを集めてくれた人）がどれだけ日本語ではなしかけても、また、日本語で話すように頼んでも、春希は英語でしかしゃべりませんでした。

帰国直前のハワイ滞在５ヶ月が過ぎた時点では、「あの、カレーに入れる長くて赤いやつ何？」という風に、「にんじん」のような基本的な日本語の単語が思い出せずに英語で質問する始末でした。

そのうち、春希自身も自分の日本語が戻ってこないのではないかと心配になってきたよ

うでした。私は、「日本へ帰ればすぐに思い出すから」と安心させ、当面、いいたい文章はキーになる単語で代用し、ジェスチャーで補って切り抜けるように指示しました。結局、帰国後５週間で春希の日本語は回復しました。２ヶ月たつと英語に日本語が混じりだし、３ヶ月たつと、「英語でしゃべりなさい」と叱らねばならないほどになりました。

俗に、子供は 言葉を覚えるのも速いかわりに、忘れるのも速いとよく言われます。年齢の違う子供達の言語喪失を研究し、そういう結果を報告している研究者（Hansen-Strain , 1990）もいますし、また同じ子が違って年齢で言語喪失を経験した場合に、小さかった時の喪失の方がよりひどかったというエピソードの記述もあります (Celce-Murcia, 1977; Celce-Murcia and Vialla 1983)。この「年齢と言語喪失」との関係（それは、裏表の現象として、「年齢と言語習得」の関係に大きく関わってくるのですが、）を、春希の日本語喪失のデータを手がかりに、次回のＢＪの中で考えてみます。

その６　　子どもの速い言語喪失と言語回復――神経言語学的説明

言語習得（裏返せば言語喪失）の成否や速さに、習得者の年齢が大きく影響を及ぼすことは、素人、専門家ともに実感しています。

このシリーズの２回目で論じた「臨界期」というテーマはまさにこの関係の解明を試みるもので、具体的には、臨界期が思春期までであるとか、いや７才までであるとか、いくつかの提言があります。臨界期の年齢について意見が分かれるのと同様に、その理由にもいろんな説があります。生物学的な理由（脳の laterilization, plasticity）や、認知、心理的な理由（例、子供は大人よりも本来のコミュニケーションの目的と関係のない細部に注意をはらう）、言語的な特色（子供の言語生活には言葉遊びやルーテイーンが多い）とか、言語環境的（子供には motherese に代表される、言語習得に有利な質のインプットがある）要因等、様々に分かれます（cf. Long, 1990）。

言語喪失（attrition）研究、特に病的（卒中や事故）なケースでない、正常なバイリンガリズムの言語喪失研究は歴史が浅いので、年齢と attrition を正面から論じた文献は少ないのが実情です。ただ、小さい子ほど言語喪失がひどいらしいというおおざっぱな傾向はみえます。また、外国語（ L2）の attrition の場合、別の変数として、忘れる前の言語能力が低いほど、attrition も進むという報告もあります（de Bot and Clyne, 1989）。

.８０年代からの、言語学者による「正常な」バイリンガルの言語喪失研究では、markedness, typological universality, processing demand, rule simplicity, L1-L2 influence などの言語学的な理論をてこにして attrition がどのようにして進むかが明らかにされつつあります (Seliger & Vago, 1991)。

さて、こういった言語習得及び言語喪失の過去の業績に、春希の経験した日本語喪失と回復のケースを照らしてみると、次のようなことが考えられます。

（１）春希はハワイ滞在たった４ヶ月で日本語の文章が作れなくなったのに対し、春希と同じ期間、同じ様に毎日英語で暮らした大人の私にはそんなことが起こり得ないことを考えると、子ども特有の速い言語喪失は言語環境などの外的な要因ではなく、生物学的な内的な要因が決定的に関与しているのではないかということ。

（２）５才半の春希の日本語は、大人の言語力と比べれば幼いとはいえ、基本的なシンタックスは完成され、単語数も多く、同年齢のこどもと比べても遜色のないものでした。こんなに発達した日本語でも、子どもの場合あっという間にしゃべれなくなるということは、何らかの子供特有の attrition のメカニズムを示唆しているのではないかということ。

（３）他の多くの言語喪失のケーススタデイと比べると、春希のデータには Regression Hypothesis（難しく、従って後に習得したものほど早く忘れるという仮説）や、英語の interference による日本語のルールの組み替えを思わせるようなものが一切なく、従来の伝統的な言語学的なアプローチでは春希の attrition を説明することができないこと。

春希の attrition を説明するために、私は神経言語学的なアプローチが要るように思います。Levelt の言語産出モデルをもとに作られた Green（１９８６）のバイリンガルのプロダクションモデルによると、言語産出の経路は、（１）言いたいことの概念をまとめる conceptualizer のレベル、（２）それを言葉にマッピングする formulator のレベル、（３）文章を発生器官を使って音に出す articulator のレベルに分けられます。この各レベルが崩壊するか、もしくは各レベルのシステムは健全でもプロセスすることができなくなると、言葉がしやべれない、文が作れないという現象が起こります。バイリンガル話者にとって不必要な方の言語にはプロセスを抑制する力が加わり、この抑制を適宜解除できるためには頻繁な input や output で脳に trace を作る必要があります。

私の現在時点での仮説は、子どもの場合、ある言語を使わなくなると、大人とは比べものにならない強度でその言語に抑制がかかり、プロセス不能になるというものです。それがその子にとってのＬ１であり、非常に発達した言語であってもです。文法、単語などの言語

システムは損傷なく残っていて、再度その言語を使い出せばあっという間にまた産出できるようになるにもかかわらず、子どもの脳は一時的に使わない言語をプロセスしなくなるCです。

詳しいことはまだ分かりませんが、このような、若い脳に独特の「現在使用中の言語にのみ集中する」特色が、言語習得のスピードや最終到達能力と年齢のと関係を解明する上にも役にたつような気がしてなりません。

その７－最終回　　日本語と英語の読み書き

このシリーズ最終回の今回は、今日本で一年生をほぼ終えようとしている春希（６才１１ヶ月、１９９４年２月現在）の日本語と英語の読み書き能力について報告します。

春希と３才下の妹とを日本語と英語のバイリンガルに育てようと決めた時、私は読み書きの能力についてふたつのことを覚悟していました。その一つは、日常会話ができるバイリンガルは簡単に育つけれど、もっと高度なことを話せ、読み書きも両言語ともによくできるバイリンガルは少ないということです。英語のネイテイブスピーカー（ＮＳ）と日本人との間に生まれて家庭内に日本語と英語のＮＳがいる場合ですら難しさは同じで、それぞれの家庭で親はあらゆる努力をしています。

もうひとつは、literacy の能力は字をおぼえたとたんに１から始まるのではないということです。人間が読んだり書いたりするものには、物語、ドラマ、科学の記述、人との会話等、色んなジャンルの文章が含まれています。会話の中にも、教室で先生にいう会話、家で親に話す文章、同世代の友達とのやりとりなどいろいろなレジスターが含まれます。実際に読み書きが始まる前に、親から色んな本を読み聞かせてもらうことによって、子どもはいろんなジャンルやレジスターを理解し、本を開いた時に、次にどんな文章が出てくるかを予測する力がつくのです。この下地（oral literacy）がなくては高度な読み書きの力はつきません。ベッドタイムストーリーを読んでもらっていない子どもがいくらセサミストリートをみてＡＢＣをおぼえても、物語がすらすらと読め、立派な感想文が書けるようにならないのはこのためです。

ですから我が家では、日本語にしろ、英語にしろ、字そのものを書いたり読んだりすることを学校へ上がる前に強要することはせず、もっぱら本を読んでやり、読んだ本やビデオ

について話し合い、子どもの oral literacy skills を高めるようにしてきました。4才くらいまでは、本を読んでもらうことは親との遊びの一部なので、ベッドタイムと限らず、要求されればいつでも読んでやり、友達と遊ぶのが忙しくなってくる4才以降には、毎日寝る前に小1時間を本読みの時間にあててきました。

さて、日本語の読み書きですが、春希達の通った保育園はモンテッソーリー教育なので、読み書きの一斉勉強は行われず、気のむいた時にやりたい子が園にあるかなの練習用紙などを使って練習する程度でした。保育園を卒園する時点で、春希はひらかなは鏡字だらけなら書け、本もたどたどとなら読めました。

小学校へあがるととたんに長い文章も上手に音読できるようになり、小学生用の月刊誌（日本語）を買ってやると自分でどんどん読む（黙読）ようになりました。書く方も問題ありません。

英語の読み書き訓練は、春希が5才の時（１９９２年9月）ホノルルの kindergarten に5ヶ月通った時に始まりました。ここで、簡単な phoneme の規則を学び、ABC の書き方を学びました。しかし、5ヶ月後の帰国の時点では、綴りはめちゃくちゃで、家で本を読む練習をさせようとしてもすぐにつっかえて読めないので嫌がり、やめざるを得ませんでした。

春希が1年生になった秋ごろに、親の都合で半年後の3月にスウエーデンに行くことが決ったので、子供達は英語で教えてくれる学校へ入れる方針をたてました。ちょうどこの頃、春希の「お勉強」（宿題など）の習慣が大分ついてきたので、「スウエーデン行きの準備」と称して、英語の本読み練習を再開することにしました。1ページに２－４行の絵本を選び、最初は1日数ページずつ、慣れると1冊を音読させます。秋には同じ本を１０回くらいよまないとすらすらと読めなかったのが、1月になると、２－３回読めばすらすらと読めるようになりました。書く方も、I went skiing today などの簡単な文章を2文ほど手本に書いてやり、書きうつさせました。もうこれで、3月に英語の学校へ入れば、簡単に同年齢の子どもに追いつけると思います。

総じて我が家の読み書き訓練法は、次の3つにまとめることができます。

（1）膨大なよみきかせによって oral literacy skills を高めておく

（2）子どもの readiness ができるのをまつ

（3）英語圏の国へ行くなどのチャンスがあればそれを最大限に利用する。

References

Celce-Murcia, M. (1977). The effects of summertime French immersion experience on the English and French speech of a bilingual child. In C. Henning (Ed.) *Proceedings of the First Los Angeles Second Language Research Forum* (pp. 77-85). UCLA TESL Section: Los Angeles.

Celce-Murcia, M and Vialla, G. (1983). The second French immersion experience of an English-speaking child (age 6:8). In K.H.Long, and S. Peck (Eds.) *Second Language Acquisition Studies* (pp. 126-140). Rowley, Massachusetts: Newbury House.

Cummins, J. 1981. *Bilingualism and Minority Language Children.* Ontario Institute for Studies in Education, OISE Press, Toronto.

----. 1984. Bilingualism and cognitive functioning, in S. Shapston and D'Oyley (eds.) *Bilingual and Multicultural Education: Canadian Perspectives.* Multilingual Matters, Clevedon, 55-67.

de Bot, K. and M. Clyne. 1989. Language reversion revisited. *SSLA*, 11, 167-177.

Green, D. W. 1986. Control, activation, and resource: a framework and a model for the control of speech in bilinguals. *Brain and Language*, 27, 210-223.

Hansen-Strain, L. (1990). The attrition of Japanese by English speaking children. *Language Sciences*, 12 (4), 367-377.

Hyltenstam, K. 1992. Non-native features of near-native speakers: On the ultimate attainment of childhood L2 learners. In R. J. Harris (ed.) *Cognitive Processing in Bilinguals.* 351-368. Amsterdam: Elsevier Science Publishers.

Leopold, W. F. 1939, 1947, 1949a,1949b. Speech *Development of a Bilingual Child: a linguist's record, I Vocabulary growth in the first two years; II Sound learning in the first two years, III Grammar and general problems in the first two years, IV Diary from age two.* Northwestern University Press, Evaston.

Long, M. H. 1990. Maturational constraints on language development. *SSLA*, 12, 251-285.

Oyama, S. 1976. A sensitive period in the acquisition of a non-native phonological system. *Journal of Psychological Research.* 5: 261-85.

Seliger, H. W. and R. M. Vago. (eds.). 1991. *First Language Attrition*. New York: Cambridge University Press.

紹介

湯川一家は純幸（４４才）、笑子（４０才）、長男春希（７才）と長女翔子（４才）の４人家族である。

純幸は富山大学人文学部の行動文化講座に属し、コミュニケーションや談話分析のコースと教養科目としての英語を教えている。笑子は今年（１９９４年）３月よりストックホルム大学バイリンガリズム研究センターの博士課程の学生として勉強中。それ以前は、短大や専門学校などで異文化間コミュニケーション、外国語習得論、英語教授法、英会話などを教えていた。

春希は小学校２年生、翔子は保育園児で、今春富山の公立学校（園）を離れ、現在は両方ともストックホルム市内にある英語で教えてくれる学校（園）に通っている。

このモノグラフは、全国語学教育学会バイリンガリズム研究部会が作り出したシリーズの一つです。この部会はバイリンガリズムの調査計画や調査多角化を促進することを目的にしています。また、会員間の相互援助の基盤となる場所を提供します。

このモノグラフの原典はもともとBilingual Japan、この部会のニュースレター、に連載されていました。それを広報委員、Mary Goebel Noguchi, Kathy Yamane とStephen M. Ryan がモノグラフの形にしました。

バイリンガリズム 部会 とその出版物に関するさらに詳しい情報がお知りになりたい方は、Mary Goebel Noguchi、〒610-03京都府綴喜郡田辺町草内山科５６－１９(FAX: 07746-3-6003). までご連絡下さい。

This monograph is one of a series produced by the Bilingualism National Special Interest Group of the Japan Association of Language Teachers. The group aims to encourage research projects into bilingualism and to disseminate their findings. It also acts as a base for mutual support between group members.

The text of this monograph originally appeared in serialised form in the pages of *Bilingual Japan*, the bi-monthly newsletter of the group. It was produced in monograph form by the Publications Board: Mary Goebel Noguchi, Kathleen Yamane and Stephen M. Ryan.

For further information about the Bilingualism N-Sig and its publications please contact: Mary Goebel Noguchi, 56-19 Yamashina Kusauchi, Tanabe-cho, Tsuzuki-gun, Kyoto 〒610-03 (FAX: 07746-3-6003).